

4. 新郷地区 5 選

(1) 今に残る高目集落の信仰

① 高目村の寺社

江戸時代の高目村は、現在の荒木・高目・小清水自治区のことである。他の地区あまり見られない、高目村における信仰を紹介する。高目は海拔400m前後の村で「大清水」と呼ばれている湧水がある。その水量は多く、どうどうと音をだして流れ落ち、高目・小清水・平明・呼賀の水田を潤している。その清水の脇に大清水神社がある。この水の恵みに感謝しての神社であろう。安永9年(1780)、水林(今の水源涵養林)として大峯を指定し、相守るよう藩が指示している。高目には麓山神社の祠がある。町では唯一のものと思う。高目は現在23戸で暮らしているが、明和8年(1771)には40戸の暮らしが成り立っていたのである。田畠だけでなく山の恵みがあったからである。



富士神社の胎内くぐり

海拔509mの富士山の山頂には、山の名前の由来となる富士神社の祠がある。この祠は胎内くぐりができ、3回くぐると生まれ変わることができるという。人の一生のうちには、不安や悩み・人に言えないことや良心の呵責などがついて回るものである。そんな時に参拝し、胎内くぐりをすることで新しい日々が始まる。庶民の願いを叶えてくれる信仰の山である。

高目には示現寺がある。寺伝によれば、仁安2年(1167)の建立とある。寺は字寺前にあるが、慶安4年(1651)に字畠福より移転したという。畠福の道脇に「じおう堂(十王堂)」と呼ぶ場所がある。十王様信仰は平安時代後期から鎌倉時代にかけて盛んに信仰されたという。そのほか滝坂の地蔵堂にも十王像が祀られている。橋屋の龍藏寺にも十王像が祀られている。高目には十王像がないが、「天明八年(1788) 法師智心 十王堂守智心」と過去帳にある。

愛宕様というと愛宕神社と思うが、小清水と八重窪には愛宕堂がある。小清水には、室町時代の永和2年(1376)に愛宕仏像地蔵尊が建立されている。

② 隠れキリシタン

会津にキリスト教が広まったのは蒲生氏郷の入部からと言われ、秀行時代が最も盛んと言われ、宇都宮への領地替えの時に領内各地に広まったという。幕府の禁教政策により信仰の対象となるのを剥奪されると、それに替わる変形したものを求めたという。十字の四ツ目や変形文字などである。

高目村にもキリスト教の存在がうかがえる。高目諏訪神社右側に、おんば様の祠がある。祠の正面は十字文様の四ツ目になっている。町指



隠れキリシタンの四ツ目十字の祠

定重要文化財の石仏の背面には、変形十字が彫られている。小清水の墓地には3体の変形十字の墓がある。荒木には木地師の墓の後にある2体の墓に、変形十字が彫られている。高目の墓にも、変形十字が刻まれている。これらは、元禄年間のものが多い。荒木生まれの古老から、マリア像を実家の縁の下に隠したと言わされたことがある。

そのほか、新郷地区で珍しいものがある。橋屋の金毘羅神社に煙草神社が合祀されている。昭和17年に小野町の煙火神社から分社してもらったという。

戸中には御前神社と青麻神社がある。両社とも織物・機織に深いつながりがある。

井谷には太子堂がある。幕府の宗教政策で改宗させられたが、個人所有のため今に残っていると思われる。

漆窪には、大正8年建立のト相教の上田貞養神靈の墓がある。越後国住人とある。



(2) 阿賀川の滝殺生と悲願の橋

① 滝殺生

文政12年(1829)、8代藩主容敬公巡見時の「道筋手鑑」に、杉山村滝殺生・木曾村川殺生とある。魚を捕るのに滝と川の違いはどこにあるのだろうか。太古より川を遡上する魚は大切な食料であった。滝坂では寛永中(1624~1644)に労力をもって河岸を割砕き漁場を作り、捕えた魚を藩主に献上したとある。その漁場を滝穴・穴滝といっている。自然に掘られた穴に魚がよどむのを見て、穴を掘れば漁場になると考え工事をしたのであろう。

寛永18年(1641)、数年荒らした滝を普請して、以後荒らさぬようにし、せりによって滝



の権利を決めるように、加藤公の家臣堀尾兵右衛門の名で滝坂に申し渡されている。

貞享2年(1685)には銚子ノ口前後にある5つの滝を、月の15日は滝坂、5日は徳沢、10日は大下野尻(今の端村)で魚を捕り、商売をして役銀をおさめていた。

柴崎の瀬頭・岩穴滝場は寛政元年(1789)、村の源右衛門が試みに穴をうがった所、魚がよりついてきたので、10名ほどで岩穴を掘るも思うように進まず石切や土方を雇い5年をかけて工事を行った。瀬頭はおよそ堅70間、横15間。穴滝1ヶ所で11面あり、橋立6面、柴崎5面となっている。滝坂が明治12年に提出した川漁場は7ヶ所あり、それぞれに滝の名がついている。

② 阿賀川に橋を

柴崎・橋立では、対岸の上野尻・下野尻へ舟が人や物の輸送を担っていた。増水や強風などで休まざるを得ない日も多かったであろうし、橋があれば便利と思う人もいたことであろう。それを具体化する動きとして、文政6年(1823)、三方村(喜多方市高郷町)肝煎唐橋新十郎より、銚子ノ口への架橋計画が出される。橋が架かれば運賃収入の道が途絶えてしまうので、柴崎や両野尻より補償の要望書が出されたためにすぐには受け入れられなかった。文政11年(1828)と天保5年(1834)にも要望書が出されているので、架橋の動きがあったと考えられる。

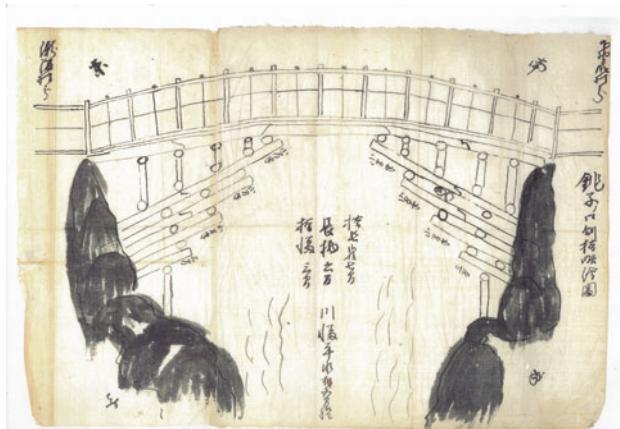
架橋とは別に文政6年(1823)に安積新平の申し出で瀬頭に舟橋が完成するが、文政8年には同じ場所に舟橋の計画が出されているので利用期間は短かったようである。その後も何回か舟橋の計画があり、嘉永3年(1850)には完成直前の舟橋が10月の洪水で流失している。これを見てからか、同年三方村肝煎より再び銚子ノ口への架橋願が出されている。明治6年1月に柴崎で舟橋を着工し、翌年7月28日に渡り初めを行うが、9月13日大洪水のため流失してしまう。同年12月、柴崎から舟橋新規願が出され、舟橋にかける住民の熱い思いが伝わってくる。

明治18年8月滝坂の五十嵐健次・佐藤嘉藤治・笛川村外四ヶ村・群岡村外三ヶ村・その他3名の人によって銚子ノ口への架橋願書が出され、それが認められて工事に取りかかった。それは巾3間・長さ28間の木造アーチのモダンな橋であったが、完成直前に請負人の失策(重量計算の間違いという)で落橋し、関係者の望みは一瞬にしてついえてしまった。

岩越鉄道の完成もあり、大正5年、柴崎と上野尻との間にワイヤーを張り、岡田式の渡航工事が竣工し、利便性が増した。しかし、大正11年11月14日に渡船が激流で転覆し、船頭武藤善伍は一児を助け、もう一児を助けるようとするも殉職してしまう事故も発生した。

この事故もあり「阿賀川に橋を」と新郷村を中心に県に働きかけ、昭和13年7月31日県知事君島清吉をむかえ柴崎橋完成の渡橋式を行っている。

「阿賀川に橋を」の願いは115年後に実現したのである。この橋は昭和34年上野尻発電所竣工まで利用されていた。



銚子ノ口の架橋計画略図
(所有: 石本 翼氏)

(3) 会津と越後を結ぶ裏街道

越後裏街道といわれる道路が新郷を貫いている。柴崎－石坂峠－樟山－平明－漆窪から陳ヶ峯峠となり、喜多方市高郷町小土山にぬけている。この街道、会津と越後を結ぶ最も古くて重要な道路であった。

永延2年(988)、城四郎重範が会津に八館を築いたという説がある。会津坂下町宇内の陣が峠城が造られたという。城一族が越後からどの道を通って、会津に進出したのであろうか。高寺の衆徒ここにて敵を防ぎし所とあり、高寺と城一族が戦ったので陳ヶ峯と名づけたという。大谷にかけて数万騎沢・旗子沢等の名があり、宇内にも同様の地名がある。何らかのつながりがあるのではないかと思う。峠の頂上南側に城館館跡が見つかっている。恵日寺の衆徒頭の乗丹坊が信州の横田河原に向かった時、ここを通ったともいう。

滑沢には城越山がある。

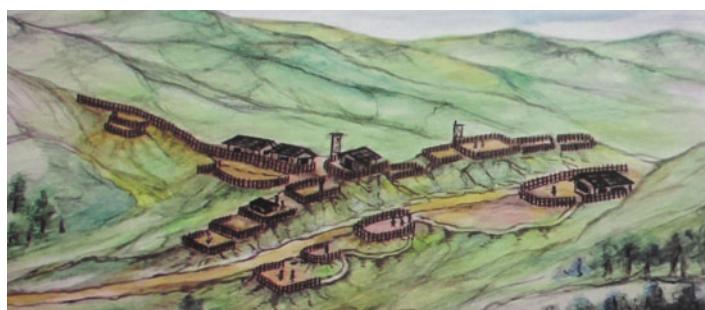
「城越山 相伝ふ 昔中野三十坊とて此の山麓に巨刹あり 佐原義連を相拒みて楯籠りし所」なりと『新編会津風土記』にある。源頼朝は文治5年(1189)、会津四郡を佐原義連に賜うとあり、佐原氏の勢力と城氏との間での戦いであったようである。これらのことから、城一族の会津進出は新郷の道を通って行ったことがうかがえる。

また伊達政宗が会津を支配した時、館野山に越後の上杉景勝にそなえるため二重の空堀の館を築こうとしたり、富士山の立岩側に狼煙の見張り小屋があって、富士山頂で狼煙を上げたといわれている。

戊辰戦争では8月29日のあかつき、柴崎に松代藩・新発田藩・広島藩の藩兵が上陸した。柴崎には広島藩の一小隊、滝坂には新発田藩の小隊、井谷へは新発田藩の小隊を向かわせた。夕方、長州の奇兵隊はじめ諸藩の兵が柴崎に集結し、1つは奥川へ、1つは陳ヶ峯峠へ、1つは井谷へと向かうこととなる。夕七つ頃(午後4時)、東軍60名ほどが滑沢に進出してきたため、西軍は石坂峠と一番クラ山より発砲する。東軍は利あらずと平明に退き、西軍は滑沢に宿営する。翌30日、東軍は午後に樟山へ引き返し、正源寺の杉林を盾に砲戦をしかけるが、二方の山から攻められ平明に退く。9月1日には、平明高橋の墓地と笠松山で撃ち合いがあったという。井谷に進出した西軍は2日、三手に分かれ中山・赤岩を目指して攻撃を開始し、激しい撃ち合いになり、西軍に討ち死にや手負いが出るも、長芸2藩の背後からの攻めに抜刀の戦いとなり、東軍は退き西軍は中山で一夜を明かす。2日未明、西軍は陳ヶ峯峠の東軍を本道より奇兵隊、左山上より芸州が攻撃する。東軍は朱雀二番隊や斎藤一率いる新選組等が応戦するも敗れ、館原・木曽へ退却する。

こうしてみると、新郷の街道は軍事的には最も重要な道路であることが分かる。

江戸時代に入ると戦いはなくなつて次第に物資の輸送にとって重要な街道となり、越後裏街道として整備されてきた。特に北方(喜多方市)や米沢藩の産物は主にこの街道を通り、柴崎で舟越えをし、徳沢・津川へと運ばれる。これらの輸送を担ったのが山三郷等に特に認められた中追馬



陳ヶ峯峠陣跡（復元図）

であり、文政11年(1828)、塩中追いは山三郷隨一の産業と記されている。

この街道を会津藩主が2回通行している。

1回目は3代藩主正容が新発田領境見分のため、その巡視の帰りに8月3日下野尻で昼休み後、阿賀川を舟越えし、柴崎へ、そして陳ヶ峯峠を通って木曽村泊まりとなっている。一行は436人という。

2回目は文政12年(1829)6月、8代藩主容敬一行380人が新発田領地巡見に赴き、赤谷より引き返し津川泊まり。翌日、鹿瀬から日出谷・馬取から樅木峠を越え、奥川に入って吉田泊まり、そして木伏峠・陳ヶ峯峠を通り、木曽でお昼、そして帰城となっている。

この通行時には通過する村等の説明のため「御巡見道筋手鑑」があり、それぞれの村の石高・家数・人数・馬数・産業(田畠以外の仕事が書かれており、村々の特徴が表されている)が書かれ、老人(70歳以上)の名前と子育ての者(3人以上)の名前が書かれている。

天保14年(1843)6月、幕府は金山見分のため役人3人を調査にあたらせ、同道者を含めて73人が20日に木曽村から小土山村の鉛山を見分し、陳ヶ峯峠を通り吉田新田村に泊まっている。

この時に陳ヶ峯峠と木伏峠に小休所小屋と手水置場所が設置されている。

文久3年(1863)4月、高目村では27人で無尽を始める。参加者に陳ヶ峯として藤三郎・武七・三蔵の名がある。茶屋の家主であり、この峠には3軒の茶屋があった事が分かる。

立岩側の茶屋は大正の初めまであったようで、明治21年に磐梯山が大爆発した時、新郷村役場吏員は峠の茶屋に行き爆発を確認したという。

明治7年12月21日、平明に山都・群岡間の立ち寄り局として五等郵便局が設けられる。配達区域は新郷と奥川の全域と高郷町の揚津。局長は置かず、薄茂七が取扱人となった。



(4) 化ケ物沢と化け猫伝説

① 化ケ物沢

旧新郷小学校と笛川郵便局との間にある沢を化ケ物沢といい、この沢の由来には2つの説がある。

1つは生き埋説である。樟山村の肝煎が役人の非道にあい、財産を召し上げられてしまった。

復讐しようとしたが果たせなかった。63歳にもなり自ら死んで神仏の力にすがって果たそうと、小学校裏の墓地に生き埋になったという。以来、時々怪霊が現われたので化ヶ物沢と名づけられたという。この話の元は、元禄10年(1697)、樟山村肝煎喜三郎が未進金を出したため、肝煎職と田宅が召し上げられたため遂電してしまう。代わって柴崎村肝煎忠左衛門弟小右衛門が未進金を弁納し、肝煎となる。喜三郎は、5年後に赦免され帰村しているので生き埋めにはなっていないと思われる。樟山はその多くの田畠が笹川沿いにあり、毎年のように繰り返される水害に苦しめられていた。平明の作坂から樟山までの川通りが、一面の川原になった年もある。その復旧や年貢の減免などをめぐり、藩との間にいさかいがあったのは確かである。

もう1つはオサイ亡霊説である。樟山から平明に奉公にきたオサイが不義の子を身ごもり、誰にも相談できず、悩んだ末に川へ身を投げ自ら命を絶った。哀れに思った村人が村界の墓地に埋葬した。ところが、夜な夜な子供を抱いたオサイが現れ、道行く人に「この子を抱いてください。どうか抱いてやってください。」というので、村人や旅人が恐れるようになり、道行く人が途絶えてしまった。この話を聞いた小島の和尚さんがオサイの靈を寺に連れ帰り、読経を唱え成仏させたのでオサイが現れなくなったという。



現在の化ヶ物沢

② 高目の猫騒動

むかし、むかし、高目の新屋敷^{あらやしき}に家が4、5軒あった頃の話だとき。ある日、旅の芸人がお寺で、唄や踊りを見せに来ただとき。村の人もみんなそれを見に行つただとき。ところが、新屋敷のある家では、来たばかりの嫁に「おめえは家の中でもきれいに掃除でもしてろ。」といって、見に行きたい嫁だけをつれていかながっただど。

嫁は「何ぼ来たばっかしの嫁でも、オレどこだってつれて行けばいいのに。」と行きたくて行きたくて声を出して泣いていただど。そしたら飼っていた猫が「嫁こよ、嫁こよ。そんなに行ぎでのか。そんなに唄や踊りが見てのか。」といったとき。すると「オラもみんなと同じように見て。」といったとき。「そんじゃ俺が寺よりも上手に唄や踊りをやって見せっぺは。」といって、次から次へと唄や踊りをやってみせたなど。

嫁は涙をながしながら「猫様ありがとう。本当にありがてな。」といって手をたたいて喜んだなど。その時猫は「これこれ嫁こよ。このことは絶対よその人にしゃべんざねえぞ。」と何回も何回も念を押しただど。

嫁は、はじめは猫のいうことを守っていただど。んじゃげんども、しゃべきゃくてしゃべきゃ

くていても立ってもいられなくなっただどさ。10日位もぞもぞしてもしゃべんなかったけど、どうしても我慢できなくなって、村の人に「オラ寺さ行がねけど、猫にそれ以上の唄や踊りを見せてもらった。」とたいそう自慢しただ。

そしたら「俺があれほど言うなとゆったのに。お前はペラペラとしゃべったべは。」と猫は怒って嫁の咽に食らいつき、食いちぎっただど。それが元で嫁は死んでしまい、働き手を失ったその家も運がくだり調子になり、そのうち潰れてしまっただどさ。

(5) 人々の暮らしに息づく観音・地蔵信仰

江戸時代には5集落に観音堂、5集落に地蔵堂があり、地蔵堂には観音様が一緒に祀ってある。また、3ヶ所に占いの石や仏様(おびんずる様など)が安置されている。御詠歌のある集落は9つあり、御詠歌はなくても、各集落で観音講が行われており、信仰の深さがうかがえる。会津の観音信仰は新郷にも浸透しており、男性は伊勢参りに行けたが、女性は行けなかったので、観音講で集まり、会津三十三観音の歌詠みで心の旅をし、サロンの場としてお茶飲みや愚痴こぼしなどで娯楽を楽しんでいた。

一方では飢饉や年貢の取り立てなど厳しい生活を強いられ、子供が産まれても半分しか育たなかった状況もあったようである。そんな暮らしのなか、近くに医者がいなかった時代、お産が軽くなるようにと近所のおばあさんが石で占ったり、病気が早くよくなるよう仏様を持ち上げたり、よくしたい部位をなでて願を掛けたり、年貢が軽くなるよう観音様にお祈りをした。



また、子供の夜泣きが治るようにと地蔵様の前掛けを借り、治ったあにつきには借りたものともう1枚新しく作ったものを奉納した。観音様や地蔵様は、老若男女にとって心の拠りどころであり、拝見すると先人たちの生きた証しがひしひしと伝わってくる。

本町でも縄文時代の土偶が出土しているが、土偶は安産・食料確保・病気治癒など人々の願いを掛ける道具、心の安定を祈る道具とも考えられているようである。この土偶がさまざまな時代に形を変え、観音様や地蔵様への祈りとして受け継がれてきたのだろう。



樟山の地蔵堂

4. 新郷地区 5選 参考・引用文献

- 1)『会津のキリストン』 1984 山内強
- 2)『会津のキリストン研究』 2004~2010 小堀千明
- 3)『新編会津風土記』 1809
- 4)『西会津町史』 1993~2009 西会津町史刊行委員会
- 5)「長谷川守家文書」
- 6)『山都町史』 1989~1991 山都町史編さん委員会
- 7)『会津高郷村史』 1981~1995 高郷村史編集委員会
- 8)『新郷村誌』 1893 松川力八 他
- 9)『喜多方市史』 1991~2004 喜多方市史編纂委員会

5. 奥川地区 5選

(1) 500年続く岩屋さまの信仰

出戸村の南西に、虚空蔵菩薩・不動明王・毘沙門天の仏像3体が安置され「岩屋さま」と呼ぶ洞窟がある。

今から500年ほど前、伊勢外宮生まれの真海という修行僧が村にやってきた。村にはもう1人出羽国長井生まれの伴越後という19歳になる修行僧が住んでいた。2人は、食物となる十穀を断ちながら、洞窟に籠り瞑想する厳しい修行を続ける僧であった。ちょうどその頃、上野尻には四国阿波国生まれの笠暁せんぎょうという仏師がきていた。この人は、ある名僧から「適当な巖窟を見付け、そこで虚空蔵菩薩を彫って祀るように」と命じられ、全国各地を探し歩いているところであった。出戸村の岩谷で修行している真海と伴越後のことを見知った笠暁は、来てみれば安置するにこれほどふさわしいところはないと思い、さっそく仏像作りに取かかった。わずか2ヶ月余りで立派な虚空蔵菩薩など3体の仏像を彫りあげることができた。虚空蔵菩薩



は知恵を授け、商売繁盛のご利益があるとされる仏様であり、立派にでき上がった虚空蔵様を見て、村人はたちまち深く信仰するところとなつた。

ところがある冬の日こと、真海は村の法要に出かけた帰り、岩屋への急な石段で足をすべらせ、真っ逆さまに川へ落ちて命を落としてしまったのである。村人たちは悲しみ手厚く葬り墓をつくることとした。しかし、今ではその場所はわかっていない。

それから200年ほどたった頃、越後国横越生まれの直応という修行僧がやってきて、この岩屋に住み17年間も修行を続けていた。長く留まつた僧もなく、荒れていくのを残念に思った直応は、「御堂を建てこれからもここで住もう」と決心した。直応はすでに68歳になっていた。できるだけ早い完成を思い、さっそく協力者を探し歩いた。幸いこの話を聞き、村人やほかにも援助してくれる人が現れ、ついに完成させたことができた。喜んだ直応は御賓頭盧様を安置し、これを祝ったのであった。延享2年(1745)のこと、祭主は中町村修験大法院であった。

出戸の岩谷さまは「祈願の功德あらざることなし」といわれ、以来ますます参詣者が増え、毎年正月23日と4月13日の縁日には大勢の参詣者で賑わい、特に春の縁日には前夜からの御籠りのある賑わいであったという。今では毎年9月13日を縁日として500年近く続いてきた信仰を守り続けている。

出戸村に直応が岩屋さまに滞在しているのとほぼ同じころ、隣の松峯村に1人の行脚僧が滞在していた。ろくじゅうろくぶひじり六十六部聖ろくじゅうろくぶせであった。名は明らかでない。村の長である矢部佐太郎は世話をするうちに、聖の厚い信仰にふれ、自らも六十六部聖となつた。行脚僧と結縁し、「諸国六十六部巡礼供養塔」を建てたのである。碑には、享保6年(1721)と刻まれている。道目村にも同様の碑があり、廻国聖にとって奥川の地は何らかの靈感の感じる場所であったのかもしれない。

(2) お聖天さまを拝む

極入村の中ほどにある丘の上に「お聖天さま」と呼ばれる歓喜天社がある。麓に真言宗金蔵寺があり、寺の左側参道石段を上ったところに御堂が建つ。歓喜天社は多くの彫刻で装飾され、堂内にも様々な彫刻がみられる堂々たるものである。歓喜天社は、徳一が金蔵寺とともに大和国猿沢邊の工者水口八右衛門に造らせたものと伝えられ、歓喜天像は高寺から移したと伝える。いわゆる「高寺おろし」である。像は銅製で“象頭人身”的男女二身が抱き合う姿の、もとはインドの神である。



出戸岩屋さま祭礼



この像は秘仏であり「見れば目がつぶれる」と伝えられ、その禁忌は固く守られ誰も目にしたことがないという。

お聖天様の靈験は、その姿から男女の和合はもとより良縁・子授け、あらゆる障害を除き裕福となる、手芸や針仕事など手仕事が上達するなど一切のご利益があるといわれ、強力である。賭けごとの必勝祈願さえありという。戦時中は、「戦死を免れる」や「弾に当たらない」などといわれ、戦勝祈願の旗を立て参詣する出征兵士や家族が多くみられた。御堂内にはこれに関する奉納品も多く飾られている。

町指定重要文化財の絵馬は、喜多方市関柴町の絵師白幡伯雅が描き、明治31年12月に奉納されたものである。堂内には会津若松市の人々が奉納した絵馬もある。信仰する人・参詣する人が遠くに及んでいたことが知れる。

しかし、熱意のない信仰に対しては容赦ない報復があるという恐ろしい神であるともいわれる。戦時中、出征兵士となった息子の無事を願い毎日のように参詣していた母親がいた。願いは叶い息子は無事に戻ることができた。しかしながら、喜びのあまりお礼の参詣を忘れてしまったのである。そのため、戻った息子は間もなく病氣で亡くなってしまったという。そのような話も伝わる。

明治27年、堂宇建築のため近村に寄付を募っていることから、現在の御堂はこの時に建築されたものであろう。御堂には数多くの彫刻がみられる。向拝には、3本爪の龍・菊花・牡丹・渦巻きなびく雲があり、他の箇所には阿吽の獅子・竹籠毬で遊ぶ3匹の猫・大根と鼠等々がみられる。彫った人は佐渡の大工であり、この人は、近隣で多くの仕事をし、現阿賀町深戸で生涯を閉じている。

また、御堂正面にある「大聖歓喜天」の扁額は、宮城三平と親交のあった会津本郷町の書家徐晏坡の筆のものである。

(3) 堀の開削に生涯をかけた理左衛門

① 矢部理左衛門の新田開発

矢部理左衛門は名を政方といい、当時大割元(後の郷頭)であった矢部彦左衛門の嫡男として、元和元年(1615)、真ヶ沢村に生まれた。幼い頃より農耕に関して興味が強く、広く事業を興すことを考えていたという。この頃の農民は困窮し逃亡離散するものが数多くみられ、田畠の荒れは頗る多かった。

寛永20年(1643)、保科正之が会津藩主として入部すると、宿望を果たすのはこの時とばかり



歓喜天社



に向原・井岡間の開墾を願い、出許された。

正保3年(1646)には弟政次に家督を譲り、この地に移り住んだ。それから困難を極める作業を続けること十余年、ついに開田に成功し吉田新田を開いたのである。その功績により郷頭職が与えられることとなった。その後も新田開発を続けるとともに失跡民を戻すことには奔走し、越後・米沢などから124人の逃亡者を復籍させたという。寛文6年(1666)まで理左衛門開鑿による新田の年収高はおよそ2,233石となり、新たに開鑿された堰は41、その総延長は36,750間にも及んだ。

また、困窮者に田畠を与えるなどの善行も少なくなかったという。その後郷頭職を辞し嫡子三右衛門に家督を譲り、山都三ツ山の新田開発に関わった。理左衛門による新田開発は新たな独立家族を生みだし、これによって奥川地域の村々は大きく変貌を遂げる時代となった。寛文7年(1667)8月没、享年53歳であった。

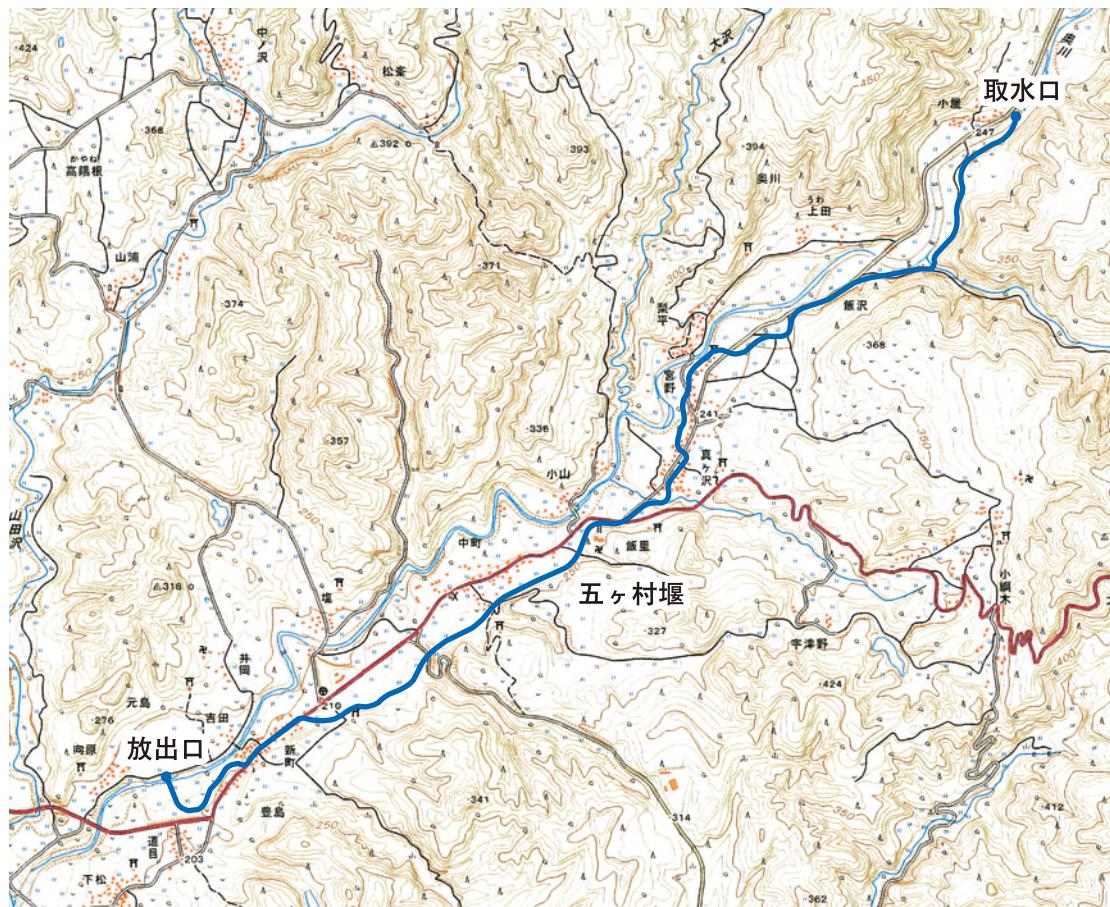
屋敷裏にある「勧業篤志碑」は、明治25年に福島県が理左衛門の業績を改めて称讃し、建設したものである。篆額は松平容保筆。山都三ツ山村にも同様の碑がある。



勧業篤志碑

② 五ヶ村堰

奥川地区の集落の多くは、奥川両岸の段丘面に点在している。比較的幅広い段丘の比高は、新町あたりで20mほどとなる。こうした村では地下水を得ることは容易ではなく、飲料用井戸



さえ持てない状況であり、生活用水も灌溉用水も小さな沢の水や堤に頼らざるを得なかった。しかし、これでは干ばつの年などにはなす術もなく、結局豊富で安定した水を得ることが村人の宿願であった。

こうして、奥川左岸小屋集落付近を取水口とする堰の建設計画が立ち上がったのであった。これが「五ヶ村堰」の誕生である。取水口は標高およそ250m、そこから下流にある宮野・真ヶ沢・中町を経て、新町村中を流れ、再び奥川に放出される。新町村の標高は210mほどである。「大堰」とも呼ばれるこの堰は、延宝7年(1679)に書かれた「堰改め帳」には「大堰 長さ二千六百五十間 幅三尺 深さ三尺 建設年不明」と記され、地域では現在においても最大規模を誇る堰である。この堰は矢部理左衛門の開鑿した堰ではなく、それ以前の「真ヶ沢組」といわれた時代の建設と考えられる。「真ヶ沢組組頭」の家に生まれた理左衛門は、のちに多くの堰の開鑿を行っている。子どもの頃に家の前を流れる五ヶ村堰の建設様子をみて、自らの役割を心に刻んだのであろう。

(4) 戊辰戦争と龍泉寺

慶応4年(1868)の越後口から入った政府軍(広島藩・新発田藩など)の兵力に押される会津軍は退却一方となった。会津軍は館原代官所を本拠地とし、陳ヶ峯峠や奥川口を防衛拠点として阿賀川北部の護りを固めた。奥川口では小高い場所にある龍泉寺を陣地として胸壁や砲台を築き、道を挟んだ向かい側の山に農兵を配置して挟み撃する作戦を立てていた。

9月2日早朝、肝煎らの話で敵軍がまだ来ていないことを知った砲兵隊は道目村まで進むこととした。柴崎村口から奥川へ入るには木伏峠を越えるか男山を越え下松へ出るかである。どちらにしても道目村は通過するため、道目村で新町村側と裏山塙根沢側の二手から政府軍を攻撃する作戦を立てた。しかし、砲撃したもののわずか20名前後では200名余の政府軍に対し勝ち目はなく、たちまち反撃され敗走せざるを得なかった。本隊も応援に行こうと中町村あたりまで来たが、大勢の敵を見て龍泉寺へ引き返してしまった。これをみた政府軍は龍泉寺を攻撃、中に隠れていた兵に鉄砲を放った。道目村から敗走した兵も龍泉寺に戻ろうとして斬り合いも起こっている。数時間に及ぶ激しい戦いの末、夕方近くになってついに会津軍は退却を決めた。これを追う政府軍と再び小綱木村で戦いとなる。村人は官軍の鉄砲玉が飛んでくるのを恐れ急いで畠を立て隠れたという。また、会津軍の兵士1人が敵の状況を見るためサデに上がって見渡していたところを撃たれ、死亡したという。

この奥川の戦いでは会津藩士5人が戦死し、宮野村肝煎矢部政左衛門も亡くなった。龍泉寺で戦死した朱雀士中隊安藤元四郎の墓は龍泉寺墓地にあり、小綱木村墓地には「機山釿勇居士」とある隊士の墓もある。



名前は記されていない。大正6年、小綱木村では各戸2銭の寄付金を集め、「戊辰戦死者五十年祭」を行っている。

龍泉寺本堂には数多くの弾痕のある柱数本が残されている。弾痕はすべて一方向からのものであったという。

この戦いの様子を記録した人物が梨平村にいた。その記述は次のようなものである。「九月一日まで官軍方にては、諏訪峠に陣をとり、同日にありて津川町に渡り、その夜に下野尻まで来たり。下野尻より官軍打掛け柴崎村・ナギノ平にて当国人数陣をとり大合戦あり。然るに二日に至り我が奥川に来たり。当奥川にては真賀沢龍泉寺へ九月一日に寺西口へ胸壁をつき置きたるに昼九ツ頃大合戦あり。官軍は中町より相向う。また、百姓は鉄砲を持って小山墓場より向う。その合戦に当国御人数三名死す。また、その時宮野矢部政左衛門戦死仕り候。当国死人三名龍泉寺裏共有墓に埋葬」



龍泉寺本堂柱の弾痕

(5) 奥川軌道と歩んだ近代化への道

①木材・木炭を運んだ奥川軌道

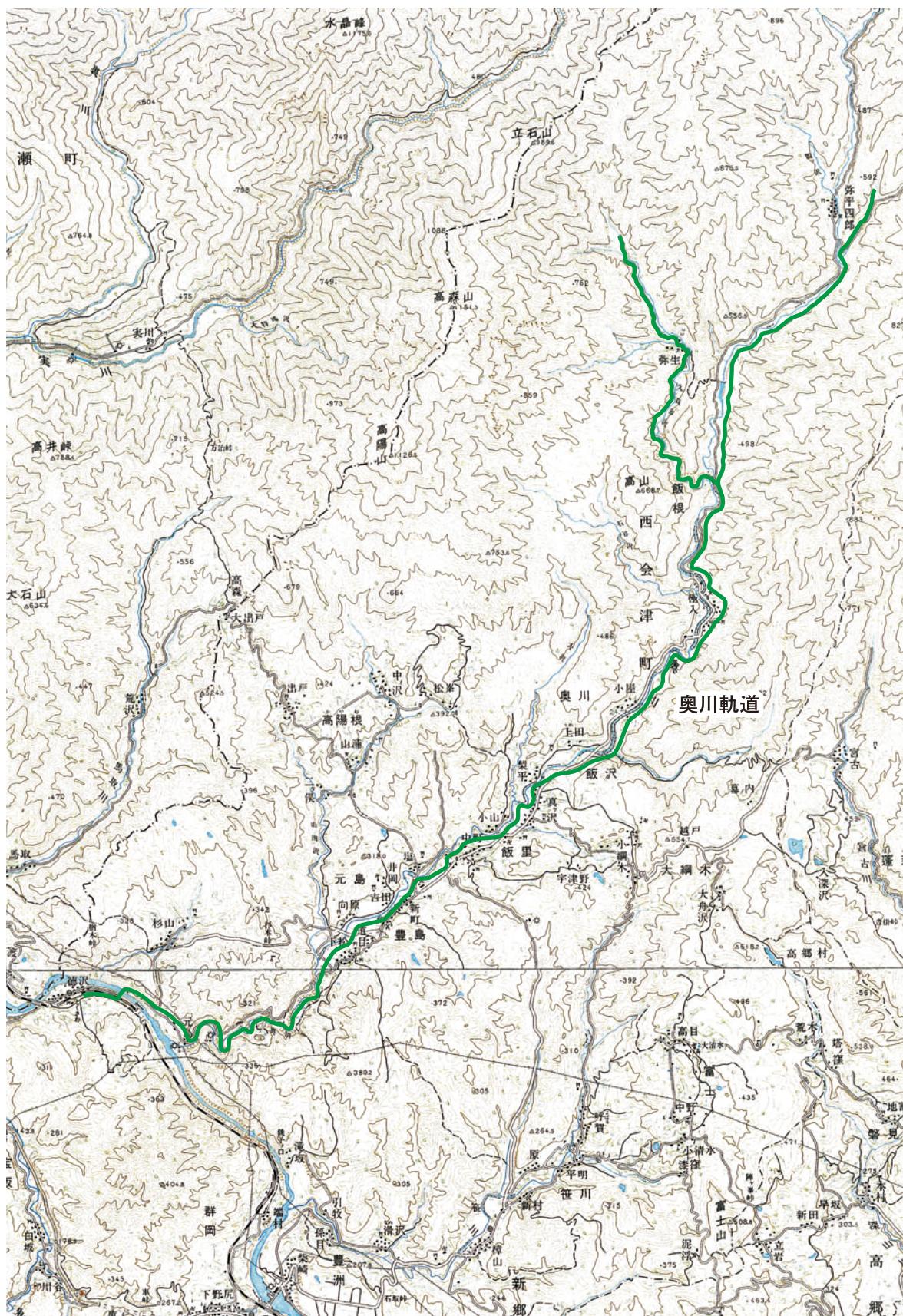
今から100年ほど前の大正時代初め、奥川に2つの近代化を象徴する出来事があった。1つは水力発電所の建設であり、もう1つが徳沢・弥平四郎間の軌道＝トロッコ道建設である。奥川地域にとって「明るい未来が見えた」と思われる出来事であった。

奥川軌道は、大正3年、岩越鉄道全通により開設された徳沢駅から奥川に沿って、飯豊山麓の弥平四郎集落東の角間沢まで約20kmを結ぶものであった。明治45年から計画が進み大正7年には幹線部分が完成している。林区署という国の機関(のちの営林署)が建設したもので、勾配は平均1.5%ほどとなった。その後に何本かの枝線(石谷沢・久良谷沢・アツラ谷・小峯沢)が建設され、中でも極入村北から西側に延びる久良谷(倉谷)沢の弥生集落を抜ける軌道は、昭和37年に廃止となる最後まで活用された軌道であった。この軌道は本線よりは少し遅れて昭和6年に完成し、弥生集落を経て、鏡山登山道入口付近までのおよそ4.5kmに渡る枝線である。現在鏡山登山者用駐車場のある場所には9家族の住宅と学校や倉庫があった。この村は「上官行村」と呼ばれていた。住人の多くは、県外から働きに来た人であった。

久良谷沢奥の鏡山(1339m)やそれに連なる山々には、ブナの木が豊富である。ブナは用材としての価値は低いといわれるが、古くは木地椀の材料として利用されていた。この当時はアメリカで玩具の材料として需要が高く、多くは輸出用として伐り出されていた。その後、太平洋戦争中には“軍用木材”としての伐り出しもあったといい、当時の昭和18年5月22日付けの新聞に掲載されている。「軍用木材として、樹齢400～500年、直径2尺余のブナ・朴の大木が、ト



奥川軌道跡



口屋さん 9名と 4頭の犬を以て出発、途中諏訪神社でお祓いを受けたのち日章旗を先頭に徳澤駅まで運ぶ」と多くの木材は極入集落北につくられた営林署の製材所に運ばれ、ある程度加工された。この製材所にも、ここで働く人やその家族が住み、1つの村を造っていた。

この路線の途中にある弥生集落は、太平洋戦争後にできた開拓村で、上官行村から移った人もあったが多くの人は近くの弥平四郎村からの開拓移住者であった。村の人はトロッコを利用して、真ヶ沢公会堂で上映される映画を見に行ったこともあった。夏休みには子供たちがトロッコを押す作業を手伝うこともあり、そんな折、小学6年生の男の子が後ろから来たトロッコに挟まれ亡くなるという痛ましい事故が起こっている。

奥川村ではこのトロッコ輸送の利便性から“民間活用”を申し出、この結果、毎月6日間だけの利用が認められている。木材の輸送、薪炭の輸送に大きな威力を発揮し、販売は好調となり、これまで自給自足が主であった村の生活を大きく変えることになった。トロッコ輸送は昭和30年頃にはトラック輸送に奪われ、役割を終えたのであった。

玉石を積み上げた路盤跡は各所に残っているが、黒部峡谷のトロッコ列車の距離とほぼ同じ長さの軌道は崩落が進み、今では通行が困難となり忘れられようとしている。

②高陽山のブナ自然林

西会津町の北西部を占める奥川地域は、北に飯豊山がそびえ、西は標高1000mを超える山々が連なり、新潟県との県境をつくっている。飯豊山を源流とする奥川は、約20kmを流れ、阿賀川に合流する。この奥川両岸の狭い谷部分に主な集落があり、生活の中心舞台となる。西側に連なる鏡山や高陽山などの標高600～1000m付近は、ブナやナラ・ホウなどの自然林が多く見られ、豊かな森林資源地帯となる。今でもブナの自然林が残り、一帯は80%がブナの自然林といわれる。ほとんどが国有林地帯であるが、麓の村々はここを大切な水源涵養地帯とし、伐採計画にも抵抗し保護してきた。

また、高陽山は奥川地域のシンボルとして親しまれ、かつて麓にある奥川小中学校では、4年生からの全校登山を秋の学校行事として昭和の初めから続けてきた。住民誰もが何回か登った経験を持つ“故郷の山”である。昭和13年には出征兵士の篤志金が小学校に送金され、これを基金に頂上に祠が建立されている。

現在は、毎年5月3日に山開きを行い、県内外からの大勢の登山者で賑わいを見せている。また、冬の山スキーやスノートレッキングを楽しむ人も見られる。

山間地帯にある奥川地域では、春は山菜、秋はきのこと豊かな山の恵みを受けてきた。毎年藩への貢納品として、ぜんまいやマツタケなどがあったとも記録されている。住人は山の資源を活用して生活してきた。杉や桐、薪炭は大切な現金収入源であり、大切に育て護られてきた。特に軌道の建設によって木材や薪炭の輸送が容易となり、植林も盛んに行われるようになった。畑に桐の木が植えられたのもこの時期が多く、のちに桐特産地の1つに挙げられるようになった。山間地の木材の伐り出しは雪の降る前に行われ、雪解け近い春先に、軌道やトラック輸送の可能な場所まで人力で出された。それは「^{そりみち}櫂」による運搬であった。雪上に作られた櫂道は急な坂や雪崩の起こる崖を抜ける道もあり、丸太を3～4本積んで運搬



麓集落のぜんまい干し

する極めて危険な作業であったが、女性たちも櫂を引く作業に加わっていた。中学生くらいの男は櫂を押す作業を手伝わされていた。これとは別に、自分の家の薪を運ぶ作業も同じ様にして行われていた。山奥の薪は、1年目に途中まで運び、翌年春に自分の家まで運ぶ2年越しの作業ともなった。櫂も手作りで、主に花の木(かえで)が使われていた。

5. 奥川地区5選 参考・引用文献

- | | |
|-------------------------------|-------------------------------|
| 1)『西会津町史 第4巻』 2007 西会津町史刊行委員会 | 4)『西会津町の指定文化財』 1989 西会津町教育委員会 |
| 2)『西会津町史 第6巻』 2007 西会津町史刊行委員会 | 5)『西会津町 続編第壹集』 西会津町教育委員会 |
| 3)『奥川小学校 郷土誌』 1913 奥川小学校 | |

6. 複数地区にまたがる物語

街道・舟運・峠 物語

西会津町を通る主な街道は、越後街道とその裏街道である。

(1) 越後街道

越後街道は新発田と若松を結ぶ総延長23里(92km)の街道であるが、慶長16年(1611)の会津大地震を境に越後街道の道筋は替わっている。地震以前は、(若松)－青木－勝負沢峠－西羽賀－野沢－(津川)の道筋であったが、地震で勝負沢峠が山崩れのため通れなくなり、地震後は(若松)－坂下－東松峠－野沢－(津川)へと道筋が替わった。総延長23里の道筋は地震後の坂下廻りのものである。

また、越後街道は若松から南山通りか白河街道に接続して江戸へと向かう街道である。会津藩主や新発田・村上藩主などの参勤交代に利用した越後街道は、初めは南山通りが中心であったが、天和3年(1683)9月の日光大地震の山崩れで五十里村が水没し通行不能となった。そのため、天和3年以降は白河街道経由となり南山通りの使用期間は短かった。その後、南山通りは復旧し、参勤交代には使われなかったが、白河街道とともに江戸に廻米を運ぶ重要な街道であった。越後街道の一里塚は若松の大町四辻を基点にしておらず、白河街道と連続して設置されている。大町四辻は若松城下から各宿場までの道程の起点である。

越後街道は越後と会津の人・物(公儀・会津藩・他藩などの公用荷や商荷、会津藩の廻米・塩など)の行き交う重要な街道であったため、運輸・通信の事務及び取り締まりを行う駅所を設け、事務方(検断・問屋)が置かれた。大きい駅所では検断と問屋が置かれ、それ以外は問屋になる。西会津町には5つの宿場があったが、検断が置かれたのは野沢宿と上野尻宿(文化12年(1815)から)で、それ以外の下野尻宿・白坂宿・宝川宿は問屋であった。白河宿の例では、検断は御朱印や御証文通行による御状箱や御用物の継送りにだけ関わり、問屋は前述以外の御用物や武家通行の継送りを担ったとあるが、一般の商荷についても管理する最高責任者であった。公用の人・荷を継送りするために伝馬が各宿駅に置かれ、この伝馬は無質のものと低額の公定

賃銭のものに大別された。これ以外の一般的な使用は相対賃銭あいたいちんせんといつて前者の公定賃銭の2倍ほどであった。この駄賃かせぎは伝馬勤めをした者だけに許されていた。

また、佐渡の金や金山で働く無宿人・罪人を搬送する中心道筋は北国街道経由か三国街道経由であったが、これらに支障があった場合は越後街道が使われたので北国街道・三国街道とともに東海道などの主要五街道に次ぐ街道ともいわれた。

会津藩では街道の道や橋の整備・補修は原則区間を決めて村々が行うことになっていた。1村でできない場合は近隣の村と力を合わせて行ったが、越後街道はほとんどが山間地を通っていたため各村の財力は乏しかったので十分に整備・補修することができない状態であった。藩ではこのような状況を少しでも改善するため、村方や町方の有力者が自発的に労働力や金銭を提供する「寸志人足」というものを設け、その善行を褒めたたえた。その一例が軽沢からの切石川右岸約600間(1,080m)の道路開削で、野沢原町村の小左衛門の例を『新編会津風土記』で取り上げている。年代は不詳であるが、自発的とは言えない越後街道道普請の寸志人足申付書が代官所から原町・上野尻・下野尻の各村に出された事例もある。

江戸時代後期になると、越後街道の海道組は家も大破(ハツ田)、道が崩れ道幅が1間もない場所(宝川入口)がある上に、駅所・茶屋・馬方に至るまで通行人への対応が悪い(公用荷の増加で収入の少なくなった馬方たちが駄賃をせがんだり、割の悪い荷物は拒否したり、宿場で売る品物も粗末で高く、旅籠の賄いも悪いなど)ので奥州から北越に行く商人は遠回りでも米沢玉川通りを使うようになる。このように風評が悪くなつたため、藩では再三に渡り通達を出して指導するが思うようにいかなかった。

(2) 越後裏街道

越後街道本街道が新発田～若松なら、越後裏街道は津川・柴崎・橋立～小荒井(喜多方)である。会津盆地は南北に長く、南の経済の中心地が若松城下なら北の経済の中心地は喜多方で、江戸時代は「北方」と書かれていた。越後裏街道と総称される街道は3ルートあり山三郷(山都・高郷・奥川・新郷)を通る道である。

[3ルート]

①奥川通り：本街道—津川—鹿瀬—日出谷—馬取—樫木峠—杉山—吉田—中町—真ヶ沢—

小綱木—沓掛峠なかぞり—中反—堂山—木曾—慶徳—小荒井

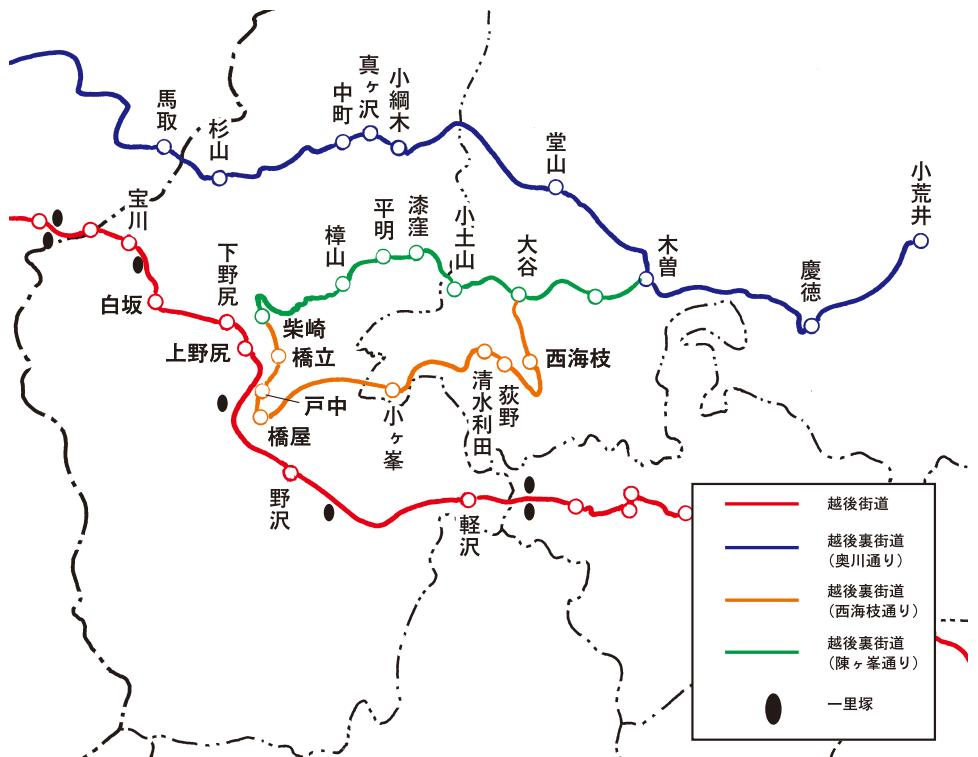
②陳ヶ峯通り：本街道—上野尻—(舟)—柴崎—樟山—平明—漆窪—陳ヶ峯峠—小土山—大谷—

館原—木曾—慶徳—小荒井

③西海枝通り：本街道—(舟)—橋立—戸中—橋屋—小ヶ峯—清水利田—荻野—西海枝—大谷—

館原—木曾—慶徳—小荒井

これらの道筋は2つの使われ方があった。1つは「廻米」を津川まで送り出す道である。山三郷などの廻米は奥川通り経由なら徳沢まで陸送、陳ヶ峯通り経由なら柴崎まで陸送、西海枝通り経由なら橋立まで陸送し、それぞれの所から船に積み替えるが直送できるのは徳沢だけで、柴崎と橋立は横渡して上野尻に送り、そこから徳沢まで陸送し船積みするか、車峠経由で陸送を続けるとなる。



もう1つは、「中追馬」による「米と塩」の搬送道である。山三郷の地域は山間地で、田畠が少なく収入が乏しいため、生活の糧として特別に認められていた制度が中追馬であった。通常の街道での搬送は1つの宿駅間しか運ぶことができない宿駅制に縛られていたが、中追馬は「付け通し(宿駅ごとに荷物の付け下ろしをしないで目的地まで同一の馬や人が荷物を運ぶ)」で荷物を運ぶことが許されていた。しかし、搬送できる品物・搬送量・馬(中追)札使用回数やルートは決められていた。品物は「米と塩」に限り、北方地方の米を夫食米に不足していた津川まで運び、帰りに塩を北方まで運び、差額を稼ぎとした。塩の駄送量は決まっており7,200俵(2俵で1駄、計3,600駄)とされ、馬札は360枚が発行された。ルートは津川から上野尻と下野尻の中程の中島渡しで阿賀川を渡り、柴崎・平明・木曾を通って北方に着くルートである。馬札改め場は下野尻または上野尻(寛政10年(1798)に平明・新町両村にも設置されたが2~3年で廃止)にあり、ここで検閲を受けることになっていた。馬を持てない者は背負荷の米を津川で売って、帰りに塩を1俵(1斗5升)背負ってきた。しかし、これらの規則も物流の増加とともに緩みが生じ、馬(中追)札で米や塩以外の抜け荷をする者が出でたり、脇道を通って中追をする者も出てくるようになり、文政5年(1822)、白坂から天満までの7駅が日出谷の者が脇道を使って中追をしていることを訴えている。津川と北方との米の価格差がなくなると利益が上がらないので中追をしなくなる。中追札の使用が年5度以下は馬札の取り上げとしたが、このようになると年々中追馬が不足となり、馬札1枚で10匹まで使用してよいとのお触れまで出している。

山三郷の裏街道は以上のように廻米と中追馬だけに許され、一般の商荷には許されていなかったが、例外として米沢の商人が買い入れた荷物のうち、塩・魚は津川役所で荷改めをし、下野尻・山三郷を通した。享和元年(1801)には、北方・山三郷から越後に出す塗物についての諸手続きが決められ裏街道をすることとなった。

(3) 西方方面への道

阿賀川流域の野沢と只見川流域の西方を結ぶ道は、現在「西方街道」と呼ばれているが、これは明治初期の命名で、西会津方面では古くは「御蔵入街道」や「金山谷道」と呼んでおり、金山谷方面からは「野沢道」と呼ばれていた。この道は越後街道と沼田街道を結びつける街道で、越後街道野沢宿から分岐して西方を経由し、河井・大登・大谷を経て、美女峠・吉尾峠を越えて、伊南・伊北郷に達する大動脈の一部に位置づけられる。新潟方面からの塩などの海産物の搬入ルートで、俗に「塩の道」と土地で呼ばれる由縁である。

街道は野沢組・黒沢村から柏木峠（現在の杉峠）を越えて、麻生村、そして西方村に通じた。藩政時代には西方と麻生との境に口留番所が置かれ、今でも番所坂と呼ばれている。西方には御蔵入領使用塩蔵や筏番所も置かれた。

大正3年(1914)、岩越鉄道が全線開通して野沢駅が開設されると、この道を使って只見川流域の人々が野沢と西方間を盛んに往来するようになる。只見線が開通するまで岩越鉄道利用のための道として大いに活躍した。

(4) 舟運

会津藩の廻米は主に南山通りと白河街道などを陸送し、鬼怒川・利根川・江戸川などの舟運で江戸に運ばれ、残りが阿賀川で新潟まで運び、そこから外航船で大坂に出した。阿賀川で運ばれたのは上方廻米とか大坂廻米と呼ばれ、年によって違いがあるが年間3万俵から5万俵ほどであった。塩川に会津盆地を流れる川が集まるので、塩川が出発点となり津川が終点となつた。

津川までの阿賀川は、川幅が狭く川底も浅い上に、どうしても通船できない難所(利田の滝と銚子ノ口)があった。慶長16年(1611)の会津大地震では利田地内(喜多方市高郷町)の崖崩れで水路が塞がれ、さらに元和6年(1620)、同地内の大黒岩という所が崩れ、高さ3mの滝(利田の滝)ができ通船が不可能となつた。この滝を避けるため、館原の姥石(同市山都町)か西海枝(同市高郷町)で一度陸揚げし、山郷発電所下流の小ヶ峯(同市高郷町)まで陸送して船に積み直して上野尻か下野尻の中島まで運び、銚子ノ口を避けるため再度陸揚げして徳沢まで運んだ。銚子ノ口は岩盤が露出し、川幅が狭く急流であったため、難所中の難所であった。「中島」は中心的船着場のことと、大水などで壊されると上流へ適地を求めて移動した。そのため時代が新しくなるにつれ中島は下野尻から上野尻へと移ることになった。また、姥石・西海枝で荷揚げしたらそのまま陸送で柴崎(後年、橋立も)まで運び、そこから横渡しで下野尻(橋立の場合は上野尻)の中島に運ぶこともあったようである。山三郷の廻米は裏街道の陸送でそれぞれ柴崎・橋立・徳沢まで運ばれ、そこから船積みすることが多かった。また、柴崎から上野尻の荒井林御蔵に渡す船場もあったが次第に上流の中島が中心となり、船場の管理が両野尻の負担となつていった。

藩では阿賀川の難所を改善するために多額の資金を投じ、元和4年(1618)・寛永6年(1629)・正保2年(1645)・貞享2年(1685)・享保11年(1726)・同14年(1729)・安永9年(1780)・嘉永4年(1851)など複数回にわたり川底の石を取り除いたり、滝を壊そうとしたりしたがうまく行かなかった。

廻米船は当初、ひらたぶね艦船であった。大艦船は塩を250俵、中艦船は187俵、小艦船は150俵積載し

たそうであるが、小艦船でも川幅が狭く川底の浅い阿賀川では少し大きかったようで、小型の鵜飼船110俵積を使用するようになって通船しやすくなったという。鵜飼船は一般には長さ13～15m、幅1.7～2mほどで米を30～50俵積といわれており、110俵積の鵜飼船というのであるからもう少し大型で、前掲の『下野尻万覚書 第二部』の「廻米船の大きさは長さ9間(16m)、幅9尺(2.7m)」というのに合うのであろう。船の運航に関しては船着場から次の船着場までそれぞれの地域の住民が責任を負わされていて、何事かあった場合には関係の百姓が負担しなければならなかった。

船の下りは川の中央を通り、上りは川岸から曳夫が綱で船を引いて上ったそうで、その道を「綱手道」といい、明神橋の上流の北岸壁に今でも残っている。この時、船はまっすぐに上るのではなく、岩や流れに逆らわないようにうまく蛇行したりしながら上ったそうである。

(5) 峠

西会津町は山間地であるため多くの峠がある。その中で歴史的知名度が高く、峠道が整備されたりしている8つの峠を「西会津ぐるっと山ネットワーク」が「西会津八峠」と命名した。それらは次の道筋にある。越後街道の鳥井峠・車峠・東松峠、越後裏街道の樅木峠・花立峠・陳ヶ峯峠、阿賀町土井と安座(野沢)を結ぶ九才坂峠、西方と黒沢(野沢)を結ぶ杉峠である。

① 鳥井峠

越後街道のハツ田宿を宝川宿に向かって出るとすぐ眼前に山腹を削った道があり、ここを一気に上るとすぐに峠に達する。「鳥井峠」である。早春であるなら若葉の間から北東の方角に残雪をいただいた飯豊連峰がそびえ立つ。奥州と越後の境で、越後から来て初めて飯豊山を遥拝できる場所であったため、飯豊神社の一の鳥居を建てた所であったので「鳥居峠」の名があるという。後年、「鳥井峠」と改めている。

明治44年オーストリアのフォン・レルヒ少佐が大国ロシアに勝った日本陸軍の視察に来ていた。高田(新潟県上越市)で日本陸軍の将兵に一本竿のスキーを教えた事で有名である。この少佐が高田から会津を陸路訪れた時、峠の少し下がった所にあった「両国屋」という茶屋で休んでいる。この時、赤ん坊を背負った「猿袴」^{さるっぽかま}姿の若い女性を珍しがって写真におさめている。

現在の道は三方道路をさらに改良した旧国道49号で、越後街道は峠から現道の西側(右上)に道形があり、ほぼ一直線に宝川に向かって下るがそれほど急ではない。

② 車峠

慶長16年(1611)、会津大地震で傾いた天守閣改修のため、加藤家2代藩主明成は用材(木材・石材)の調達を領内各地に命じた。この時、安庄村の肝煎二瓶七左衛門が現在の県境地帯の山間部から用材を切り出し、川谷側から下野尻村の方に運び出すため切り開いた道筋が「車峠」といわれている。車峠が開かれたのは、5層の天守閣に改修を開始したのが寛永16年(1639)であるからこれ以前ということになる。

この峠道は下野尻から蛇行しながら峠に達し、峠をすぎると街道はほぼ一直線に「樅木沢」右岸の斜面を削って川谷まで下っている。この道筋ができる前は車峠の北側に旧道があつて「古車坂」と呼んだそうである。川谷側には「古車沢」と呼ぶ沢がある。旧道はこの古車坂と

古車沢の道筋ではないかと思う。なぜ車峠と名付けたのか由来はわからない。繩木沢の名は、大石に繩をかけて引き上げようとしたが、どうしても繩が切れてしまうので「つなきりざわ繩切沢」と呼んだことが由来であるという。

峠の茶屋は寛政元年(1789)、下野尻の者が2軒の茶屋を建てたのが始まりである。昭和55年の豪雪で倒壊してしまったが、最後まで残っていた石川氏宅は殿様のお休み部屋や警護と脱出の便を考えた特殊な構造となっていた。明治11年(1878)、イギリスの女性旅行家・紀行作家のイザベラ・バードが日本の奥地を旅行した時、この峠の茶屋(茶屋の特定はできていない)を訪れ、大変気に入ったため2泊(6月29~30日)している。

岩越鉄道(現磐越西線)が大正3年に全線開通すると、峠を利用する人は減少していった。やがてモータリゼーションの到来を迎えると峠の場所は変わらないが、道路は車が通れるように街道を大きく迂回するように改良され、昭和46年(1971)に現在の国道49号が全線舗装路で開通するまで国道49号として幹線道路であった。

③ 束松峠

車峠と同じ理由で二瓶七左衛門が切り開いたといわれているが、この道筋はもっと古くからあったものと思われる。その昔、北条時頼が天屋村を通った時、「陸奥の満田の山の束松 千代の齢を家つとにせん」と詠ったということが地元の人の口伝えに残っているというから、鎌倉時代にはすでに道があったものと思われる。

『新編会津風土記』によると、「昔、この峠の頂に三株の松があつて互いに束ねたようであった。これを『束松』といった。」とあり、峠の名はこれによるものである。この松が枯れてしまったため、道の東200mほどに生えていた枝葉が高くそびえ、筈を立てたようで枯れた三株の松に似ている松を「子束松」といったが、宝暦(1751~1764)の頃、また枯れてしまった。ここから北東の方に再び一株の松が生え、枝が全部空に向かっており脇から見ると杉に似ている。これを「孫束松」と名付けたという。延享4年(1747)、松平家4代藩主容貞が藩内巡回で束松峠を通った時、峠道に入つてすぐにある三本松が束松かと案内役の野沢組郷頭長谷川久七に尋ねた。久七は、これは束松ではなく、親束松はもう枯れてしまい現在あるのは子束松であることを説明している。

寛政4年(1792)、片門・本名の両村の者が峠に2軒の茶屋を建てた。この峠からの眺望のすばらしさを『新編会津風土記』では絶賛している。十返舎一九が文化13年(1816)に書いた『越後路之記』で、「束松という峠にかかり、いたって難所なり。行き行きて峠に至れば、ここに茶屋二軒あり。したりなものを売る。また小鳥の焼鳥名物なり。」と記している。先述のイザベラ・バードは、田園地帯ののっぺりとした風景にうんざりしていたが、束松峠道に入ると景色が一変したのに感動し、「こんどは山岳地帯にぶつかった。その連山は果てしなく続き峰を持つ磐梯山、険しくそそり立つ糸谷山(飯豊山)、西南にそびえる明神岳の壮大な山塊が、広大な雪原と雪の積もっている峡谷を持つ姿を一望のうちに見せている。(中略)これこそ私の考える所では、ふつうの日本の風景の中で欠けている個性味を力強く出しているものであった。」と記している。

④ 楠木峠

越後裏街道の1つ「奥川通り」にある峠で、西会津町奥川の杉山と阿賀町馬取間にある。杉

山からは緩やかな上りで、あまり苦労せずに峠に着く。奥川通りは小荒井(喜多方市)と津川を結ぶ道であり、山三郷の廻米は杉山経由で徳沢まで出したが、中追馬や背負荷で米や塩を運ぶ道ではなかった。文政12年(1829)、第8代藩主松平容敬が新発田領境まで領内巡見の折、小川庄馬取村から山三郷杉山村に入るこの峠で小休止された。この時、吉田組郷頭宮城三九郎と杉山村肝煎佐藤三次郎が出迎えている。両名はこれを記念して石碑「上様御小休所」を建てた。町指定重要文化財である。

⑤ 花立峠

『新編会津風土記』の大舟沢村の項に、「村から北北西の方角約1.9kmにある。小綱木村へ行く道である。ここに花台石と彫り付けた石塔がある。高さ90cmほど。この所は飯豊神社の正面に当たるというので石塔を建てたという。」とある。地元では飯豊山の遥拝所として花を飾ったからこの名が付いたと伝えている。現在、花立台といわれているのは中央が円形に彫られた四角い石台で、地中に埋まっているかどうかは不明であるが高さは20cm程度である。奥川通りにあたる。

⑥ 陳ヶ峯峠

越後裏街道「陳ヶ峯通り」で山三郷の廻米や中追馬・背負荷で喜多方地方の米を津川まで運んだり、津川から塩を喜多方へ運ぶ認定街道にあった峠である。通行が盛んな頃には茶屋が3軒あったそうである。明治になると裏街道の中で一番早く道の整備がなされ、上野尻や野沢へ出る便が良くなつた。

『新編会津風土記』では「陳ヶ峯峠は小土山村の西23町にあって、端村立岩の北に連なり吉田組に通じる径路で、山中に数万騎沢・旗子沢等の字がある。いつの頃の戦争なのか高寺の衆徒がここで敵を防いだ所という。」とある。会津戦争では柴崎から進軍して来た新政府軍を大鳥圭介率いる旧幕府軍や斎藤一率いる新選組も参戦した会津軍が迎撃ったが守り切ることはできなかった。

⑦ 九才坂峠

阿賀町土井と西会津町安座の間にある峠である。安座村肝煎二瓶七左衛門は鶴ヶ城天守閣改修の用材搬出の功勞で小川庄大倉山一帯の伐採を加藤家から許された。九才坂峠と南にある大倉峠も木材の伐採・搬出と関係があるものと思われ、往時は多くの関係者が行き來したのであろう。この人々のための塩や米を津川や野沢から運ぶ馬を「ダン馬」と呼んでいたそうである。昔は土井の人々が津川に出るより道は急だが短いので野沢に買出しに出るのによく使ったそうであるが、現在は登山道になってしまった。

名前の由来であるが、弘法大師が9歳の時、この峠を土井から安座へ越えたのでそう呼ばれたと伝わっている。また、安座村が百足や大蛇の祟りで疫病が蔓延し苦しんでいるのを聞いた弘法大師が土井から「救済」に向かったので「救済坂」。これがなまって「九才坂」という説もある。弘法大師がどこから来たのかについては土井説の他に、ちょうど諸国行脚の途中、如法寺に来ていたので如法寺から来たという如法寺説、どこから来たか不明説がある。いずれにしても険峻な山々と奇岩に取り囲まれていながら平坦で開けた感じのする安座独特の景観から

やしゃぬま
八蛇沼伝説が生まれ、そのためにはどうしても弘法大師の偉大な法力が必要であったのである。

⑧ 杉峠

御蔵入に運ぶ塩や海産物は、野沢宿はずれの徳蔵橋付近で越後街道から分かれ、「御蔵入街道」とか「金山谷道」と野沢の人々が呼んだ道を通って西方方面に運ばれた。金山谷方面ではこの道を「野沢道」と呼んでいた。この道を牛尾一出ヶ原一黒沢と進むと山地になり頂が杉峠で、峠を下ると西方に着く。『新編会津風土記』では柏木峠となっている。昭和23~30年頃までは野沢-柳津間、野沢-宮下間に定期バスが走っていた。

この道筋は中世の頃から金山谷の領主山内氏が支配しており、出ヶ原の観音堂(国指定重要文化財)なども山内氏が金山谷から当地に移動させたものである。山内氏が当地まで勢力を伸ばしたのは金山に関係があるのかもしれない。黒沢地区の赤羽根山一帯は西会津でも有数の鉱山地帯で、その鉱山の1つ「杉峠鉱山」と呼ばれる鉱山が杉峠付近にある。日向倉山流紋岩中の石英脈及び粘土質網条帶に含まれ、上部には金、下部になるにつれて黄鉄鉱や黄銅鉱が産出し、白神鉱業会社が採掘した。



6. 複数地区にまたがる物語 参考・引用文献

- 1)『西会津町史 第1巻』 2007 西会津町史刊行委員会
- 2)『歴史の道 越後街道』 1984 福島県教育委員会
- 3)『若松市史 5』 2001 会津若松市
- 4)『会津の街道』 1985 会津史談会
- 5)『西会津町史 第4巻』 1992~1995
西会津町史刊行委員会
- 6)『福島県立博物館調査報告書 第18集』 1999
- 7)『わかりやすい会津の歴史』 2011
歴史春秋社
- 8)『下野尻万覚書 第二部』 菊地憲
- 9)『新編会津風土記』 歴史春秋社
- 10)『岩越紀行』 1911 フォン・レルヒ写景 蜻州執筆
- 11)『会津風土記』 歴史春秋社
- 12)『日本奥地紀行』 1973 イザベラ・バード 高梨健吉訳
- 13)『西会津ふるさと伝説』 1985 丹藤明
- 14)『会津の峠 上』 1975 会津史談会
- 15)『西会津町史 第2巻』 2009 西会津町史刊行委員会
- 16)『西方の記憶つなぐ』 2012 西方地域づくりサポート事業実行委員会